

## 第一章 Z世代、工藝に出合う

「1／100の手紙」から始まった挑戦

「経年美化」という価値観を起点に

なぜ伝統工藝だったのか

全然売れなかった通販サイト

「野暮ったい器」が輝くとき

「美しい」とは何だろう

全感覚でとらえる美の世界

言葉が眼の邪魔になる

素材との対話

工藝における「個性」とは何か

いいモノを正しく届ける

## 第二章 工藝から学んだ、これからの生き方・働き方

僕がインド仏教僧になったわけ

師・佐々井秀嶺上人との出会い

「執着」と「ありがたい」は違う

職人のリズムは自然のリズム

伝統工藝で空間プロデュース

「景色」のアップデート

良いモノを見分けるポイント

いまを生きる工藝職人たちの「あり方」

## 第三章 知られざる工藝の世界

「なぜ」「どのように」「何のために」作るのか

「民藝」百周年のいま、柳宗悦の言葉を見つめ直す

「他力本願」の本当の意味

熟練職人が作業中に考えているのは「今晚の献立」？

## 第四章 これからの日本の工藝をつくる職人たち

折井宏司（富山県・高岡銅器「モメンタムファクトリー・Orit」）

川副隆彦（佐賀県・鍋島焼「鍋島虎仙窯」）

清原聖司（滋賀県・綴織「清原織物」）

相良育弥（兵庫県・茅葺き「くさかんむり」）

島谷好徳（富山県・鍛金「シマタニ昇龍工房」）

田籠みつえ（福岡県・織物「翔工房」）

津田六佑（石川県・水引「津田水引折型」）

都倉達弥（東京都・「左官都倉」）

中川周士（滋賀県・「中川木工芸 比良工房」）

根本幸昇（東京都・江戸切子「根本硝子工芸」）

「箔座」の熟練職人のみなさん（石川県・箔）

波戸場承龍・波戸場耀鳳（東京都・紋章上繪師「京源」）

菱田昌平（長野県・大工アーティスト）

福田隆・福田隆太（東京都・組紐「龍工房」）

細尾真孝（京都府・西陣織「細尾」）

松岡茂樹（東京都・家具工房「KOM A」）

技術を使いこなす「人柄」

## 第五章 日本の手しごとの「いま・これから」

「自然のリズム」と「経済のリズム」のはざまで

美意識とともにある暮らしは、自分らしい生き方につながる

モノに「愛」を向けると世界は変わる

工産産業の現場の課題

「世界で一番美しい会社」、ブルネロ・クチネリから学べること

「新しい工芸」の挑戦

工芸が「道」となるとき

いまここから「伝統」の先をつくる

## はじめに

まずは何より、いまこの本を手にとってくださった方に心からの謝意を伝えたい。はじめに簡単な自己紹介をさせてもらうと、僕は二〇〇〇年生まれで現在二十五歳。ITスタートアップでの成功を志してアメリカへ留学、紆余曲折を経て、それまで門外漢だった「日本の伝統工藝」を世界に橋渡しする道を選んだ。

起業した社名の「KASASAGI（カササギ）」は、天の川で織女と牽牛けんぎゅうが会おう橋渡しをした鳥の名からとった。二〇二〇年に工藝品のオンライン販売をスタートし、現在は工藝品の特徴を活かしたカタログギフトの企画や、伝統工藝を取り入れた空間・建築のプロデュースも行っている。「なぜITから伝統工藝に？」とはよく聞かれる。さらに二〇二二年にインド仏教の僧侶として出家もしたので（しごとは継続）、いろいろ「なぜ？」と思われるやすい生き方かもしれない。

いま振り返って、すべてに通じていると思うのは、僕の出身地である大阪人的な「何かオモロイことやりたい」というシンプルな思いだ。インターネットやiPhoneの登場が僕たちの世界を急速に変えたように、自分もITスタートアップの世界でとんでもなくオモロイことができないか、というのが最初の夢だった。ITでその夢を追い続けることにはならなかったが、海外で学んだ経験から、日本で大切にされてきた感覚、モノを大切に使い続ける価値観の可能性に気づき、これを広めるには伝統工藝が最適だという発想に至った。後の出家は自分でも予想外だったが、それまでの挑戦で挫折も経験しつつ「世の中にインパクトを与えること」の意味を問い直す契機だったともいえる。

ITによるインパクトが、これまで常識とされてきた価値観や倫理観さえ、あつという間に更新してしまう力を持つように、伝統工藝に宿る価値観は、これからの急速に変化する社会でしなやかに生きるためのヒントになると僕は考えている。

ところで「伝統工藝」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。どこか古くさい、敷居が高い、ふだんの生活とはかけ離れたもの。もしくは祖父母の家にあった壺つぼや、地方に行って見かける野暮ったいお土産品。そんな印象を持っている方も多いかもしれない。

かくいう僕自身が、まさにそうだった。実際、伝統工藝は現代のライフスタイルの中で、「時代に取り残されたもの」とされてきた。けれど僕は、ある瞬間から、その認識がガラッと変わった。

それはアメリカ留学での授業中、自分の国の「消費のあり方」をテーマにピッチ（短いプレゼン）をしたときのこと。僕は日本の伝統工藝を引き合いに出し、「使うほどに味わいが深まり、経年によって愛着が増す」——そんな価値観を紹介した。つまり、「経年劣化」ではなく「経年美化」である。するとその考え方は、最先端の思想を学ぶアメリカの学生たちや教授に驚くほど強く響いた。「それってすごく進んだ考え方だね」「サステナブルで素敵だ」といわれ、工藝は「古き良き日本の文化」ではなく「新しい世界の思想」として受け止められた。これは僕にとって、伝統工藝に対する価値観が反転する決定的な出来事だった。

一見すると古くさく、時代に取り残されたような伝統工藝。けれど、気がつけばそれは「周回遅れのトップランナー」になっていたのだ。だから僕は「工藝」を単なる技術や産業としてではなく、「未来の社会をかたちづくる価値観や姿勢」として提示したい。それ

は来るべき時代の「新たな道標」<sup>みちしるべ</sup>になりうると感じている。

この思いは、自ら会社を営みながら全国の工房をめぐり、職人さんたちと向き合う日々の中で、次第に確信へと変わっていった。僕は創業してから五年間、家を持たずに全国の工房をめぐり歩いた。最初はお金もなかったもので、各地で泊めていただき、ご飯をご馳走<sup>ちそう</sup>になり、お酒を酌み交わしながら、現場の知恵にふれさせていただいた。

また一方では自身で会社を経営するなかで、これまで世の中を豊かにしてきた社会のシステムが行き詰まり、その疲弊や限界が社会の各所に見えてきていると感じている。生産主義のもとで地球の資源をほとんど使い果たした結果、各所で食糧不足や環境公害、自然異変が発生している。

「経済性を追えば環境が壊れ、環境を優先すれば経済性が立ち行かない」——そんなジレンマに直面<sup>すべ</sup>している現代において、自然と向き合い、手でモノを作り、自然と調和しながら暮らす術として発展してきた工藝の思想は、その矛盾に対する新たな「解」になりうる<sup>みそ</sup>と考えるようになった。手前味噌<sup>みそ</sup>で恐縮ながら、最近、KASASAGIが著名な経済誌『Forbes JAPAN』なづに取材していただけるようになったことも、工藝の持つ価値観が



世界で再評価され始めている証拠だと受け止めている。

しかし工藝の職人さんたちはいま、厳し過ぎる現状に立たされている。令和四年度のデータによれば、伝統的工藝品産業界の従事者数は約四万八千人、生産額は一千五十億円\*。一人あたりの生産額はわずか二百二十万円弱だ。それでも、瀬戸際でファイティングポーズを取り続ける職人さんたちを何人も知っている。僕はそんな職人さんたちに育てられながら、現場の厳しさも、未来への希望も、直に肌で感じてきた。

こうしたことを、自分なりの言葉と経験を通して伝えたいという思いから、この本は生まれた。僕が伝統工藝の存続に貢献できるとすれば、それは難しいデータや持論で危機感を煽ることではなく、工藝の素晴らしさに気づいてもらい、「モノを大切にしたい」と思う心を少しでも増やすきっかけをつくることだと思っている。

さらにいまのしごとを通じて、「モノや人に対する愛情」の総量を増やすことは、本気で世界の平和に貢献できることだと信じている。少なくとも僕自身、「大切にしたい」と思える好きなモノを愛でることで、慌ただしい日々にはんの少し心の平穏が訪れ、少しだけモノにも人にも優しくなれることを実感している。人とモノとの関係から、こうした輪

が広がっていくことで、世界のどこかで確実に平和が育まれていくはずだ。

そして、これは個人的な願いではあるけれど、お世話になった職人さんたちにとって、工藝を未来に希望を持てる産業にしていきたい。ただ、僕がこの本で目指すのは、「工藝を守ること」ではない。工藝を通じて、「人やモノを大切にする心」を呼び覚ますことだ。それが、未来を変える一歩になり、偉そうなことをいって恐縮だけれど、人類幸福の最大化につながればと、心から願っている。

\* 一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会ウェブサイト（生産額については推定値）  
<https://kyokaikougeihin.jp/current-situation/>